

スマホとマンホールの 意外な共通点

日本アイ・ビー・エム株式会社
クラウド事業統括
クラウド・ソフトウェア事業部
第二テクニカル・ソフトウェア
クライアント・テクニカル・プロフェッショナル

木村 桂

Kei Kimura

普段から4台のスマートフォンを持ち歩き、自宅には30台以上を所有する。海外出張の際にも、現地にしか売っていない端末を探しては買い求めるほど、木村桂は自他ともに認めるスマートフォン・マニアだ。

「ガジェットの筐体の中には、いろんな機能や要素がバランスよくデザインされています。新しくなる度に薄くなり、小さくなり、軽くなり、それでも性能や使い勝手はどんどん上がっていく。限られた筐体がどんどん進化していく、それがスマートフォンのスゴイところだと感じています」

木村が集めているのはスマートフォンだけではない。ここ数年は、全国各地のマンホールの写真を撮り集めている。どこにでもあるマンホールだが、そのデザインは自治体によって異なる。マンホールの写真を撮影して集める傍ら、全国のマンホールの写真を位置情報付きで投稿できるアプリ「マンホールマップ」を開発し、“マンホール愛好家”たちと情報共有している。マンホールにはスマートフォンと同じように、限られたスペースの中での表現に魅力があると木村は言う。

「例えば所沢市のマンホールには、航空機が描かれています。空港のない所沢になぜ航空機があるのかと不思議に思い調べてみると、所沢は日本で初めて航空機が飛んだ場所だったことが分かりました。直径60センチの円の中に、その土地その土地の名物が表現されているので

す。地方に出張する時は、チャンスとばかりにマンホールを探して写真を撮ってきます(笑)」

* * *

元々、木村は電機メーカーのソフトウェア子会社で社内の工場などで使われるソフトウェアの開発を行っていた。システム開発者として経験を積むうちに、「誰もが知っているソフトウェアを作りたい」と思うようになり、当時のロータスに転職。Lotus 1-2-3やLotus Notesのコンポーネントの開発に携わった。

「社内で使うソフトウェアは利用者が限られているので、良くも悪くも要望が開発者にダイレクトに届きます。しかしLotus 1-2-3やNotesといった汎用的なソフトウェアは、特定の人の意見だけを聞くわけにはいきません。どうすると万人に使いやすくなるのか、どういったものが求められているのか。それをすべて自分たちで判断しながら開発していくのがとても新鮮でした」

1995年に日本IBMに移ってからはLotus製品だけでなく、データベースやアプリケーション・サーバーなどIBMのソフトウェア全般に携わりながら、顧客への技術支援を行う業務を担当する。その後、一度は日本IBMを離れたが、2015年2月に復職した。日本IBMに戻ってくるきっかけになったのは、「IBM Bluemix」との出会いだったと振り返る。

「IBMが新しい製品を発表したのでソフトウェア開発

者の立場から感想を聞かせて欲しい、と個人的に依頼されたのがBluemixとの出会いでした。実際に使ってみると、今までのIBMにはない面白いサービスが出てきたなと直感しました。一方で、こうやって宣伝すればいいのに、何でこういう売り方をしないのだろうという思いが芽生えてきたのです。たまたまそんな時に声をかけてもらって、気がつけばまたIBMで働いていました(笑)。正式な立場ではありませんが、私自身はエバンジェリストになったつもりで、Bluemixをいろんな場所で紹介したり、お客様に説明したり、解説記事を書いたりしています」

木村は長年にわたってソフトウェア開発者としてキャリアを重ねてきた。自分がかつて開発した機能やコンポーネントが今でも製品で動いていることに、喜びと誇りを感じていると木村は語る。一度、IBMを離れたのも、ソフトウェア開発の道をさらに追求したいためだった。そんな根っからの開発者だからこそ、オープンかつスピーディーに開発環境が構築できる次世代の開発クラウドツールのBluemixに、大きな期待を寄せている。

「Bluemixを推進するためにIBMに戻ってきたと自負しています。もしかすると、一度IBMを離れているからこそBluemixを客観的に見ることができているのかもしれない。IBMの社内でも、Bluemixを私のように捉えている人は少ないのではないのでしょうか。そういう社内の意識から変えていきたいと思っています」

* * *

大学院では数学を専攻し、位相幾何学やゲーム理論を研究した。位相幾何学を応用した折り紙は、今でも趣味の一つだ。学生時代、フェルマーの最終定理や地図の四色問題といった従来は解けなかった数学上の難問が、コンピューターを応用することで立て続けに解かれていく様子を目の当たりにしたことで、木村は次第にコンピューターに興味を持つようになっていく。今では仕事と趣味がうまく重なり合う場所に立っていると木村は感じている。

「Bluemixは、モバイル・アプリ開発にも利用できるさまざまなサービスを提供します。例えばモバイル用のプッシュ機能などでも、サービスを選ぶだけで開発環境

に入っています。私はガジェットが好きなので、特にモバイルの領域でもBluemixに注力していきたいですね。ソフトウェア・サービスを作る立場でもあり、Bluemixを推進する立場でもあり、モバイルのことも分かっている。全部を自分の土俵に引き込みながら、お客様に新しい価値を届けていきたいと考えています」

木村が普段から持ち歩いている4台のスマートフォンは、通話用、ゲーム用、Androidでの検証用、そして自慢用というそれぞれの役割分担がある。4台も使っていると利用料金もそれなりの金額になりそうところだが、コストを抑えたモバイル運用も木村の得意分野だ。

「携帯ショップの店員さんよりも、料金プランや割引サービスには詳しいと思います」と、木村の顔に笑みが広がった。



木村が収集したスマートフォン・コレクションの一部



世界のマンホールの写真を位置情報付きで投稿できるアプリ「マンホールマップ」